

令和 7 年 9 月 4 日

川西市議会議長 岡 留美 様

会派（呼称）名 連合かわにし市民の会

議 員 名 中井 成郷

※議員名欄は署名又は記名

管 外 調 査 報 告 書

このたび、管外調査をいたしましたので、その概要を下記のとおりお届けいたします。

記

- 1 調査者氏名
福西勝・川北将・中井成郷・岡留美
- 2 調 査 先
北海道・札幌市、北広島市、石狩市
- 3 調 査 期 間 令和 7 年 8 月 2 8 日～ 2 9 日
- 4 調査結果の概要

別途資料添付

管外調査報告

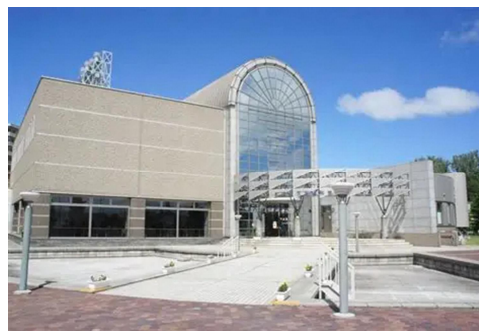
― 札幌市下水道科学館 ―

1. 視察概要

視察日時：令和7年8月28日13時～14時

視察先：札幌市下水道科学館（札幌市北区麻生町）

参加者：川西市議会 連合かわにし市民の会
福西勝・川北将・中井成郷・岡留美



本視察は、札幌市が運営する下水道科学館において、水循環の啓発・市民理解の促進・環境教育拠点としての取組を学び、本市における下水道事業の広報・教育活動の参考とすることを目的に実施した。

2. 施設概要

札幌市下水道科学館は、全国的にも珍しい「下水道をテーマにした科学館」として1985年に開館。

主な機能

下水道の役割や仕組みをわかりやすく展示・体験で学べる常設展示

下水処理や水循環に関する模型・シミュレーション

市民・学校向けの環境学習プログラム

来館者数：年間約10万人（親子・学校団体を中心）

運営：札幌市水道局（指定管理者制度を活用）



3. 視察での学び

（1）市民への「見える化」

下水処理の仕組みを模型・映像・実験を通じて体験できるよう工夫。

子どもでも理解できるように「遊びながら学べる展示」になっており、環境教育の場として非常に有効。

（2）教育・啓発機能の充実

学校の社会科見学や夏休みイベントなどと連動。

体験学習を通じて「水を大切に使う意識」を育成していた。

職員や専門解説員による案内もあり、専門的内容をわかりやすく伝える工夫がなされていた。

（３）地域とのつながり

下水道科学館は単なる展示施設ではなく、地域住民にとって「学習・交流拠点」として機能。

地域イベントとの連携や、市民ボランティアの参画も行われていた。

４．本市への示唆

下水道事業の広報・啓発の強化

→ 下水道は市民生活に不可欠である一方、普段は意識されにくい。本市でも「見える化」した啓発の工夫が必要。

学校教育との連携

→ 札幌市のように社会科・理科の学習と結びつける仕組みをつくることで、子どもたちの理解が深まり、市民意識の向上につながる。

施設整備や既存資源の活用

→ 新規に科学館を整備するのは難しくても、既存の上下水道施設に展示や体験スペースを併設する工夫は検討できる。

５．まとめ

札幌市下水道科学館は、「市民にわかりやすく水の大切さを伝える拠点」として大きな役割を果たしていた。

川西市においても、将来の上下水道事業の持続可能性を考える上で、市民理解と協力は不可欠であり、そのための「教育・啓発の場づくり」の重要性を改めて認識する視察となった。

管外調査報告

ー キッズラボボールパークこども園 ー

1. 視察概要

視察日時：令和7年8月28日15時～16時

視察先：北広島市 キッズラボボールパークこども園
児玉由利子（施設長）さま ご対応

参加者：川西市議会 連合かわにし市民の会
福西勝・川北将・中井成郷・岡留美



本視察は、北広島市が日本ハムファイターズの新球場「エスコンフィールド HOKKAIDO」周辺開発と連携して整備した「ボールパークビレッジ」に位置する認定こども園の取組を学び、本市における幼児教育・保育環境整備や地域連携のあり方を考えるために実施した。

2. 施設概要

名称：キッズラボボールパークこども園

種別：認定こども園（幼保連携型）

定員：70名（0歳～5歳児）

開設：令和5年（2023年）4月

運営法人：社会福祉法人キッズラボ



立地の特徴：北海道ボールパークFビレッジの一角にあり、スポーツ・地域交流の拠点と一体で整備された全国的にも先進的な事例。

3. 視察での学び

（1）地域連携と立地活用

プロ野球チームの本拠地隣接という環境を生かし、スポーツや健康をテーマにした教育プログラムを実施。

園児が「まちづくりの象徴的施設」に日常的に触れることで、地域と密接につながる教育環境が形成されていた。

（２）教育・保育の特色

幼児教育に STEM（科学・技術・工学・数学）の要素を取り入れ、「学びと遊びの融合」を目指すプログラム。

自然体験や運動遊びを重視し、子どもの主体性を育む方針が徹底されていた。

食育にも力を入れており、地域産の食材や球場グルメとのコラボなどユニークな取り組みもあった。

（３）保護者・地域との共生

保護者向けの交流イベントや、球場のイベントと連動した活動を展開。

「こども園＝子育て支援の拠点」として、地域に開かれた施設運営を行っていた。

４．本市への示唆

地域資源を活かした教育環境づくり

→ 北広島市では、球場やボールパークという都市資源を教育に生かしていた。本市でも地域資源（里山・歴史文化施設・地元企業など）を活用する工夫が必要。

先進的教育プログラムの導入

→ STEM や食育など、子どもの「未来を見据えた学び」は川西市のこども園・保育所でも積極的に取り入れられる可能性がある。

地域連携型の子育て支援拠点

→ 単なる保育の場にとどまらず、保護者や地域とつながる拠点としての機能を強化すべき。

５．まとめ

キッズラボボールパークこども園は、プロ野球球場と一体的に整備された全国的にも先進的なこども園であり、教育・保育と地域資源を結びつけるモデルとなっていた。

川西市においても、地域資源を最大限活用し、子どもたちが将来にわたって豊かな学びを得られる環境をつくるための参考となる視察であった。

管外調査報告

ー 再開発事業とエスコンフィールド HOKKAIDO ー

1. 視察概要

視察日時：令和7年8月28日16時30分～18時

視察先：北広島市再開発地区（北海道ボールパーク F ビレッジ、周辺開発エリア）

参加者：川西市議会 連合かわにし市民の会
福西勝・川北将・中井成郷・岡留美

本視察は、北広島市が官民連携で進めている大規模再開発の現状と、地域経済・まちづくり・子育て支援への波及効果を学ぶことを目的に実施した。

2. 再開発の概要

北広島市は人口約6万人の都市であり、札幌市と新千歳空港の中間に位置する。かつてベッドタウンとして成長したが、少子高齢化や人口減少への対応が課題とされてきた。

こうした中、北海道日本ハムファイターズの本拠地移転を契機に、「北海道ボールパーク F ビレッジ」を核としたまちづくりが進められている。

総面積：約32ha

開業：令和5年（2023年）3月

中核施設：エスコンフィールド HOKKAIDO（収容3.5万人、天然芝ドーム球場）

開発コンセプト：

- ① 世界に誇れるボールパーク
- ② スポーツ・健康を核としたライフスタイル提案
- ③ 地域経済・観光振興のエンジン

周辺整備：ホテル、温浴施設、認定こども園、農業体験施設、商業施設などを順次開業

3. 視察での学び

（1）エスコンフィールド HOKKAIDO の特徴

世界初の開閉式屋根＋天然芝フィールドを備えた最新球場。

ボールパーク内には宿泊施設や温浴、レストラン、キッズゾーンが併設され、「試合がない日も訪れ

る」仕組みを確立。

野球観戦にとどまらず、地域住民・観光客が日常的に交流できる拠点として機能している。

（２）まちづくりと一体化した再開発

球場と周辺施設を「都市公園的空間」として開放し、住民の散策・交流の場として整備。

企業・教育機関と連携し、食・農・教育・健康をテーマにした複合的事業を展開。

こども園や学習施設が併設され、子育て支援や教育拠点としての機能も発揮していた。

（３）経済効果・地域振興

開業から１年間で延べ４００万人超が来場、観光振興・地域雇用創出に直結。

北海道ブランド発信の拠点として、国内外の注目を集めている。

市は公共投資を抑えつつ、民間投資を呼び込み、財政健全性と地域振興を両立させた点が特徴的。

４．本市への示唆

民間活力を核とした再開発の可能性

→ 北広島市は大規模な公費投入を避け、民間主導で投資を誘導。本市においても、将来の再開発において「官が土台を整え、民が担う」構図を検討すべき。

交流・滞留人口を生む仕組みづくり

→ 単なる施設建設ではなく、日常的に人が集まり、滞在時間が長くなる仕掛けがまちの活性化につながる。

子育て・教育との連携

→ ボールパーク内にこども園を設置し、教育・スポーツ・地域資源を融合。本市でも教育・子育て施策と都市施設整備の連動を検討できる。

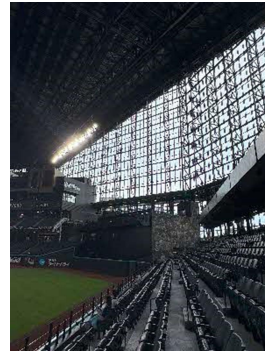
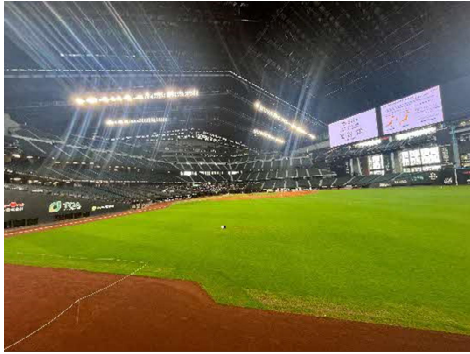
シビックプライドの醸成

→ 市民が誇りを持てる象徴的施設は、単なる経済効果以上にまちの一体感を高める。本市においても「地域の顔」となる拠点整備が求められる。

５．まとめ

北広島市の再開発は、エスコンフィールドを核に「スポーツ」「健康」「子育て」「観光」を組み合わせ、人口減少や地域活性化という課題に挑む先進事例であった。

川西市においても、将来の都市整備や施設更新を検討する上で、民間活力の活用・市民の交流拠点づくり・地域資源との融合といった視点が不可欠であり、本視察は大きな示唆を得る機会となった。



管外調査報告

― 駒岡清掃工場 ―

1. 視察概要

視察日時：7年8月29日10時30分～12時

視察先：札幌市 駒岡清掃工場（2025年竣工の最新施設）

参加者：川西市議会 連合かわにし市民の会
福西勝・中井成郷・岡留美

本視察は、札幌市におけるごみ処理施設の最新事例を学び、本市における将来的な清掃工場整備や循環型社会の形成に資する知見を得ることを目的として実施した。

2. 施設の概要

駒岡清掃工場は、老朽化した既存施設の更新として建設され、2025年に稼働開始した最新鋭の清掃工場である。

処理方式：ストーカ式焼却炉（2炉体制）

処理能力：600トン／日

発電能力：最大16,000kW（ごみ発電により、場内利用電力を賄ったうえで余剰を売電）

事業費：約600億円

PFI手法：設計・建設・運営管理を一体で民間活用

供用開始：令和7年8月

また、施設デザインは「環境学習・地域との共生」を重視し、展望デッキや環境学習スペースを併設している。

3. 特徴と視察での学び

（1）環境性能の向上

最新の排ガス処理設備により、ダイオキシンや窒素酸化物などの排出基準を大幅に下回る水準での運転を実現。

熱回収効率が高く、発電量が大きい。これは今後のエネルギーコスト高騰への対応策としても参考になる。

（２）民間活力導入による整備

設計・施工・運営管理を一体で契約することで、ライフサイクルコスト削減と高い技術水準の維持を実現。

札幌市としては、民間活力導入により、施設の維持管理費用の平準化を図っている。

（３）地域との共生

周辺住民に配慮した建築デザイン（騒音・臭気対策、緑化）。

見学者用コースや学習展示スペースを充実させ、「ごみ処理の見える化」に積極的に取り組んでいる。

子どもから大人まで「循環型社会」を学べる拠点として位置づけられている。

（４）安全性と災害対応

耐震性能を強化し、災害時には非常用電源供給拠点としての活用も視野に入れている。

４．本市への示唆

今回の視察から得られた知見を、川西市における今後の施設更新や政策検討に活かすべき点は以下の通りである。

発電・エネルギー回収の最大化

→ 脱炭素やエネルギーコスト上昇への対応として不可欠。

民間活力活用

→ 財政制約の中で長期的な維持管理を見据えた手法として検討価値あり。

環境学習・市民参加の強化

→ 単なるごみ処理施設ではなく、学習拠点としての機能を持たせることで、市民理解と協力を得やすくなる。

災害対応力の付与

→ ごみ処理施設を平時のみならず、有事の地域インフラとして位置づけることが重要。

５．まとめ

札幌市駒岡清掃工場は、環境性能・市民協働・手法のいずれにおいても全国の先進事例といえる。川西市においても、将来の施設更新や循環型社会づくりの議論にあたり、本視察で得た知見を大いに参考にしていきたい。



管外調査報告

ー 石狩こどもクリニック ー

1. 視察概要

視察日時：令和7年8月29日14時～15時

視察先：石狩こどもクリニック（石狩市花川南）

NPO 法人 ソルウェイズ

運上昌洋（共同代表）さま 運上佳江（代表理事）さま
鈴木雄介（事務局長）さま 磯部朋美（看護師長）さま ご対応



参加者：川西市議会 連合かわにし市民の会
福西勝・中井成郷・岡留美

今回の視察は、石狩市における小児医療と発達支援の連携モデルを学び、本市における子育て支援・発達支援体制の充実に資する知見を得ることを目的に実施した。

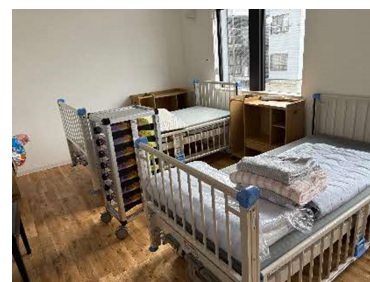
2. 施設概要

石狩こどもクリニックは、小児科診療に加え、発達外来や児童精神科を併設し、医療と発達支援を一体的に提供する地域拠点として機能している。

診療科目：小児科、児童精神科、発達外来

医療スタッフ：小児科医師、児童精神科医師、看護師

専門職：臨床心理士、言語聴覚士、公認心理師 等



主な対象：発達に課題を抱える子ども、心身に不安を抱える家庭

地域の保健センターや学校、児童発達支援事業所とも連携し、「医療・教育・福祉のハブ機能」を果たしていることが特徴である。

3. 視察での学び

（1）早期発見・早期支援の仕組み

保健センターの乳幼児健診や学校での気づきから、スムーズに医療につなげられる体制が整備されていた。

保護者が「気になる」と思った段階で相談できる門戸が広く、「待つ医療」ではなく「寄り添う医

療」が実現されていた。

（２）多職種連携の実践

医師だけでなく、心理士・言語聴覚士などが常勤し、診断から療育的支援まで一貫して提供。

チームでのケース会議や学校との情報共有により、子どもの状況を多面的に把握して支援していた。

（３）保護者支援の重視

子どもの診療にとどまらず、保護者の心理的ケアや養育相談にも力を入れていた。

保護者が孤立せず、安心して子育てに臨める環境づくりが行われていた。

４．本市への示唆

石狩こどもクリニックの取組は、川西市の子育て・発達支援施策においても参考になる点が多い。

医療と福祉・教育をつなぐ拠点整備

→ 本市でも、発達相談や小児医療が分散している現状を踏まえ、ワンストップ型の支援拠点づくりを検討する必要がある。

専門職の配置・活用

→ 心理士や言語聴覚士など、多職種連携による支援体制は、市内でも強化が求められる。

早期発見と相談体制の強化

→ 保健センターや学校と医療の連携を密にし、子どもと家庭を早期に支える仕組みを整備することが重要。

５．まとめ

石狩こどもクリニックは、単なる小児科医療の場にとどまらず、発達支援と保護者支援を組み合わせた包括的な拠点として機能していた。

川西市においても、子どもと家庭を切れ目なく支える体制づくりが急務であり、本視察で得られた知見は、今後の子育て・教育・福祉政策の検討に大いに活かすことができる。